日本体育大学紀要 21 巻 1 号 (1991) 9-20

# 稽　古　の　概　念

## ——昭和初期の剣道書と『五輪書』との比較検討——

佐久間　康

(平成 3 年 5 月 31 日受付，平成 3 年 7 月 22 日受理)

# The Concept of Keiko

## —Comparison of the Books on "Kendo" in the Early Showa Era and *The Book of Five Rings*—

Yasushi SAKUMA

In relation to the term, "keiko," this essay tries to investigate the points of sameness and difference in its concept, based on the comparison of the books on "kendo" in the early Showa era and *The Book of Five Rings*.

The result is as follows:

[Points of Sameness]

(1) The definition of "keiko" for the match on its significance.

(2) Devise, study and devotion as elements of "keiko."

(3) Emphases on master of sword technique and mental training in "keiko."

[Points of Difference]

(1) Phased progress of technique from a low level to a high level of difficulty designed in the books on "kendo" in the Showa era, contrary to *The Book of Five Rings*.

(2) The concept of "keiko" in the early Showa era defined from the viewpoint of "instruction," while "keiko" in *The Book of Five Rings* grasped in the context of "self-acquirement."

### 1. はじめに

格闘の手段として発展してきた日本の剣術は，中・近世を通して仏教・儒教・神道などと固く結びついてきた。その結果，剣術は武士の教養として取り込まれ，さらに明治以降，剣術は剣道とその名称を変えて人間形成の一助として，また学校体育の一教材として取り上げられ今日に至っている。

しかし，近代スポーツの移入にともない，その影響は剣道にも波及した。特に第2次世界大戦以降，競技化などの影響は著しくあらわれ，剣道のスポーツ化が推進されていくことになる。

ところで，剣道は戦場での技術を体系化し，それを「型」によって表現し，仏教・儒教などの思想を取り入れて伝承されてきた。その伝承手段が「稽古」であったといえる。

一方，近代スポーツにおいて，技術の伝達・技術学習は「練習」という用語によって表現されている。そのために，近代スポーツの移入とともに練習という用語が，現在の剣道稽古の中でしばしば使われるようになっている。確かに，「稽古」と「練習」の区別は容易ではなく，伝統的慣例によって「稽古」を使用している場合が少なくない。

したがって，今日において使用されている稽古という用語を整理しておく必要があるといえよう。このことは，その整理を行おうとしたとき，稽古とは何であったのかを問わねばならないことを意味している。

そこで，昭和初期の剣道書における稽古の概念と剣道の古典とされる『五輪書』における稽古の概念とを比較検討してみたい。

大学院体育学（体育・スポーツ史）

## 2. 武道における「稽古」の概念

### 1) 稽古の語源・語義

国語辞典類（表1参照）から「稽古」を概観してみると，その字義は「古の道を考える」とされ，そこから転じて「学問・学習」，「修業・練習（特に，武術・芸術などについて言うことが多い）」，「修行を積んで，学識や才能がすぐれていると高く評価されること」と定義されている。

これらの語義を基に稽古概念の変遷を概観してみたい。

現在確認できる最も古い“稽古”の記述は「日若稽古帝堯」[1]であり，中国において紀元前500年頃に書かれたとされている『書経』のなかで記されている。また，前漢一代の史実を記した『漢書』のなかにも「文景務在義民，至千稽古禮文之事，猶多闕焉」[2]と稽古という用語が使われている。これら2編で用いられている“稽古”はいづれも「古の道を考える」という意味で使われている。

その後，元嘉9年（432年）頃に刊行された『後漢書』の一節に「而以栄為少伝，賜以輜車乗馬，栄大会諸生，陳其東馬印綬日，今日所蒙，稽古之力也，（可不勉哉）」[3]とあるが，ここでの稽古は，「学問・学習」の語意として使われている。『書経』から約千年を経た『後漢書』に至って“稽古”は『古の道を考える』という概念から『学問・学習』まで広義に捉えられるようになっていったと考えられる。

一方，日本における「稽古」の記述は，古くは弘仁13年（822年）の『三代格』にみることができる。ここに

表1　国語辞典にみる稽古概念の変遷

| 字源（増補）<br>角川書店<br>S30.3.5<br>[T12.6.3] | 古典要語有識図辞典<br>武蔵野書院<br>S27.9.25 | 広辞苑<br>岩波書店<br>S30.5.25 | 大漢和辞典<br>巻8<br>大修館書店<br>S49.9.1<br>[S33.8.30] | 日本国語大辞典<br>7巻<br>小学館<br>S49.1.10 | 古語大辞典<br>図書印刷株式会社<br>S58.12.10 | 角川古語大辞典<br>角川書店<br>S59.3.10 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ① 古の道をかんがえる。 | ①②昔のことをかんがえる意で，学問のこと。 | ① 昔の物事を考えること。古書を読んで昔の物事を参考にして理義を明らかにすること。 | ① 古の道をかんがえる。 | ① 古事を考えて，物事のかつてあったあり方とこれからあるべき姿とを正確に知ること。 | ①②古えのことを稽えるの意で，学問や研究すること。 | ① 漢語。古の道や歴史を探究して，もって今のなすべきこと，あるべき姿を知るためにする。 |
| ② 転じて学問の義，学習する。 | | ② 学んだことを練習すること。学習。 | ② 転じて，学問。又学習する。 | ② 書を読んで学問すること。また，学んだところを復習すること。学問。学習。 | | ② 古書を読み，諸道を学ぶこと。習学。 |
| ③ 練習する。 | ③ 武芸などを習うこと。 | ③ 遊芸などを習うこと。 | ③ 練習する。 | ③ 修業。練習。特に武術，芸能などについていうことが多い。 | ③ 練習すること。修業すること。特に武術や芸能についていう。 | ③ 諸芸や武芸を学び習うこと。また，練習すること。 |
| | | | | ④ 修業の功を積んで学識や才能がすぐれていると高く評価されること。 | ④ ①～③を積んだ人。上達の人・碩学。 | ④ 学習の功の積まれていること。またその人。 |
| | | | | ⑤ 特に，刻苦勉励して古事につくという意を強めていう。 | | |

表 2　稽古概念の変遷

| 年　　代 | 出　　典 | 出典箇所 | 意　　味 |
|---|---|---|---|
| 紀元前<br>771<br>551(孔子生)?<br>紀元前<br>479(孔子没) | 書　　経（堯典）<br>（中国の堯典。五経（書経，春秋，易経，礼記，詩経）の一つ。堯，舜から周にいたる政治史，政教を記したもの。孔子の編ともいう。） | 日若稽古帝堯<br>〈傳〉稽考也，能順考古道，而行之者帝堯 | 古の道をかんがえる |
| 82 | 漢　　書（武帝記）<br>（中国の史書 120 巻。後漢の班固作。前漢一代の史実をしるした大著で司馬遷の「史記」と並んで中国の歴史書の双璧といわれている） | 文景務在義民，至千稽古禮文之事，猶多闕焉 | 古の道をかんがえる |
| 432(元嘉 9 年) | 後　漢　書（桓栄伝）<br>（24 史の一つ。後漢の事跡を記した史書。120 巻。本紀・列伝は南朝の宋の范曄の撰。） | 而以栄為少伝，賜以輜車乗馬，栄大会諸生，陳其束馬印綬日，今日所蒙，稽古之力也，（可不勉哉） | 学問，学習 |
| 822(弘仁 13 年) | 三　代　格（弘仁 13 年 3 月 26 日太政官符）<br>（嵯峨・清和・醍醐三天皇の時代に定められた格式を集めたもの） | 百姓饉飢，或至死者在，天事若稽古，国則隆泰 | 古の道をかんがえる |
| 1037(長暦元年)<br>1045(寛徳 2 年)?<br>1058(康平元年) | 本 朝 分 粋（弘仁格序〈藤原冬嗣〉）<br>（1037～1045年頃までに編成されたと考えられる（日本歴史大辞典）。1058 年頃成立か（平凡社大百科辞典）） | 臣等学非稽古，才闇当今 | 学問，学習 |
| 1087(寛治元年)<br>1103(康和 5 年)<br>1138(保延 4 年) | 中　右　記（康和 5 年 12 月 29 日）<br>（記事は 1087 より 1138 年に及ぶ（中間を一部欠く）（平凡社大百科辞典）。中御門右大臣藤原宗忠の日記。） | 資光者故有信朝臣三男，為観学院学頭，年廿九，依稽古之勤，殊被抽賞也 | 学問，学習 |
| 1207(承元元年) | 明　月　記（承元元年 2 月 8 日）<br>（藤原定家の日記。漢文体で書かれたもので，鎌倉時代の史料として貴重。） | 此人本自全無時代了見之心，以見及事為先例，世以為稽古之器 | 刻苦勉励して古事につくという意を強める |
| 1232(貞永元年)<br>?<br>1253(建長 5 年) | 平 治 物 語（上・信頼信西不快の事）<br>（鎌倉初期の軍記物語，作者不明）。 | 彼の在所に籠もり居て，〈略〉ひとへに武芸をぞ稽古せられける | 修業。練習。特に武術，芸能についていうことが多い |
| 1320(元応 2 年) | 花園院宸記（元応 2 年 9 月 2 日） | 丹伊於寺門然之稽古者也 | 修業の功を積んで，学識と高く評価されること |
| 1331(元弘元年) | 徒　然　草（226）<br>（鎌倉末期の随筆。兼好法師作） | 信濃前司行長，稽古の誉ありけるが | 修業の功を積んで，学識や才能が優れていると高く評価されること |
| 1339(延元 4 年) | 神皇正統記（下。後醍醐） | 邪（よこしま）なるものは久しからずしてほろび乱れたる世も正にかへる，古今の理なり。これをよくわきまえしるを稽古と云 | 古の道をかんがえる |
| 1356(正平10年)<br>?<br>1378(天授 4 年) | 太　平　記（35・北野通夜物語事）<br>（室町初期の軍記物語 40 巻，小島法師の作という） | 稽古（ケイコ）の枢（とぼて）を閉ぢ，玉泉の流れに心を澄（すま）すらんと | 学問，学習 |
| 1400(応永 7 年)? | 風 姿 花 伝（序）<br>（室町前期の能学論書　7 編　世阿見作） | 見聞き及ぶ所のけいこの条条大概注し置く処也 | 修業。練習。特に武術，芸能についていうことが多い |
| 1421(応永28年) | 満済准后日記（同年 5 月 14 日） | 且為声明稽古，各可令精好由兼触仰之了 | 修業。練習。特に武術，芸能についていうことが多い |
| 1682(天和 2 年) | 浮 世 草 子（好色一代男）（3・5）<br>（江戸前期　井原西鶴作） | 爰元（ここもと）の若ひ衆いろいろ稽古致せども声がそろはぬと申侍る | 修業。練習。特に武術，芸能についていうことが多い |

は「百姓屢飢．或至死者在．天事若稽古，国則隆泰」[4]と記され，「古の道を考える」の解釈がなされている。その後，寛徳 2 年（1045 年）頃成立された『本朝文粋』では「学問・学習」の意味として「臣等学非稽古，才闇当今」[5]と記述されている。さらに，康和 5 年（1103 年）に書かれている『中右記』にも同様に「学問・学習」の意味として「資光者故有信朝臣三男，為観学院学頭．年廿九，依稽古之勤，殊抽賞也」[6]と使われている。

承元元年（1207 年）の『明月記』では，「此人本自全無時代了見之心，以見及事為先例，世以為稽古之器」[7]と記され，単なる「学問・学習」ではなく，精神的意味を込めて，「刻苦勉励して古事につくという意を強める」の解釈がされている。

元応 2 年（1320 年）の『花園院宸記』ではさらに「稽古」の意味は広がりを見せ，「修業の功を積んで，学識や才能が優れていると高く評価されること」の意でもちいられるようになる。これは，元弘元年（1331 年）の『徒然草』においても同じような意味で用いられている。

1200 年初期頃に書かれた『平治物語』では「彼の在所に籠もり居て，〈略〉ひとへに武芸をぞ稽古せられける」[8]とあり，「稽古」が武術・芸能の修行・練習という立場で使用されている。また，室町前期の能楽全書として有名な『風姿花伝』においても「見聞き及ぶ所のけいこの条条大概注し置く処也」[9]と記述され，「修業・練習」の意味で使われている。さらに，応永 28 年（1421 年）の『満済准后日記』，天和 2 年（1682 年）の『浮世草子』においても「稽古」は「修業・練習」の語意があてはまる。

表 2 はこのような稽古概念の変遷をあらわしたものである。

これによると，「稽古」が「学問・学習」の意味を獲得した後，1200 年頃より，「学習・学習する」ことだけではなく修養的意味をもつようになったと考えられよう。さらに，1400 年頃から「稽古」は修養性を強め，主に武芸・芸道・ならいごとに用いられるようになり「修行・日本的練習（鍛錬）」として使われるようになったと推すことができよう。

次に，「稽古」の類語である「練習・修行・修業・訓練・鍛錬」について整理しておくことが必要であろう。

「練習」とは『繰り返し習うこと』，『一定の作業を反復して，その技術を身につけること』と定義されている。この定義のかぎりにおいては「練習＝稽古」とは捉えにくい。「訓練」についても同様に概観してみると，『教えこんで慣れさせること』，『目標に到達させるための実践的教育活動，組織的教育活動』，『軍隊や工場などでの実地教育の総称，軍事訓練など』と定義されている。訓練という用語には軍事的色彩がうかがえる。また，「鍛錬」は，『修養，訓練あるいは稽古をつんで，技芸や心を練りみがくこと』と定められている。さらに，「修業（しゅうぎょう・しゅぎょう）」は『学術・技芸を修め習うこと』，「修行（しゅぎょう）」は，『戒律を守って，仏の道を実践すること』，『学芸・武芸などを修めみがくこと』と定義されている。ところで，武者“しゅぎょう”の場合は，“修行”の字をあてている。

このように観てくると，「練習」は自らの意志で，あるものの技術を身につけることであり，「訓練」は自分の意志とは無関係に技術を身につけさせられることになる。つまり，“練習”は自主的であり，“訓練”は強制的言葉といえる。つまり，“練習”にしても“訓練”にしてもその意味は「技術の習得」と言うことになる。しかし「鍛錬」は，単なる『技術を習得すること』ではなく，さらにその技術を自分のものにしていく過程を示す言葉と捉えられ，練習よりは稽古に近い概念と考えられる。

また，“修業”と“修行”について，これらはいづれも『修め習う』という意ではあるが，“修業”が学芸・武芸の技術を修め習うことに対して，“修行”は学芸・武芸そのものを修め習うことであるといえるのではないだろうか。また，“修行”が仏教用語であることから，技術の習得よりもそれに伴う精神の向上にその意味が強いように考えられる。

### 2) 昭和初期の剣道書における「稽古」の概念

武道は近代社会に適応した武術（武芸）の総称であり，戦闘技術と心法とを表裏一体として捉えた日本的身体文化であると考えられる。そしてこれが「型」によって伝承されてきたことは前述したとおりである。その為，近代スポーツとは異なった思想をもち，「稽古・修行」の概念が発達したといえよう。

先に「稽古」の語源・語義について概観したが，次に現代の剣道関係の辞典から「稽古」をまとめ，ついで昭和初期の剣道書における「稽古」について概観してみたい。

図説日本武道辞典によると「稽古」を次のように定義している[10]：

稽古とは古い事物を繰えることをいい，繰り返して習うことであるから練習のことである。いわゆる学び習うことで，広く諸芸に用いられ，修業する意味

にもなる。広く修業する意味から，学問することにも古くは用いられ……中略……文学を修める意味に用いられているが，後世はほとんど諸芸に励むことをいっている。

ここでは，まず「稽古」を広義に捉えているが，武道に関しては「練習」と同義と考え，技術の習得方法と捉えているようである。また，図説剣道辞典では「稽古」を次のように定義している[11]：

一般に「練習」という言葉は，くりかえし習う，経験して習う，という意味であるが，日本古来から伝えられている武道や芸道では「稽古」といっている場合が多い。この「稽古」という言葉は，古の事柄を考えしらべる，古のことを習い達するという意味を持っているが，いづれにしても熟達するという意味には違いない

ここでも，「練習」を日本の伝統文化における慣習によって「稽古」としていることから，「稽古＝練習」と定義しているといえよう。

しかし，野間によれば次の引用からもわかるように，「稽古」は試合のための稽古であり，稽古は単なる練習ではなく，その中に「考察・工夫」していく過程が含まれると捉えている[12]：

稽古という語を字義の上から解釈しますと，古を稽えるということで，つまり，先人の教えについて工夫研究するという意味であります。すなわち稽古という言葉の中には，「考える」という意味が多分に含まれているのであります。剣道では，試合と区別する意味で，練習を稽古と呼び習わしておりますが，この剣道の稽古においても，考えるということ，すなわち考察工夫するということは，最も大切な要件であります。……中略……要するに稽古とは「工夫と努力」であります。……中略……稽古は，試合のための稽古以外には何ものもないのであります

さらに金子も野間と同様に，「稽古」を次のように定義している[13]：

稽古は古昔のことを考へる意であって，之から学び習ふ，繰り返して習ふの意義となり，物事を練習すると言ふことである。試合の要領を教育する練習であって，前に述べた基本動作及び応用動作を実際に応用し，敵の意思動作を察知して，常に攻勢に出て敵に対して機先を制し，果敢決行の気力を得，剣勢を養って以て試合の基礎を造るのである。

稽古には，基本及び応用動作と試合との連絡練習として精神を鍛錬するものと，技術の向上としての練習するの二つの方法がある (p. 356)

金子・野間によれば，「稽古」は試合を前提とした総合練習，技術向上のための練習として捉えらえている。そしてこれらは「実践の練習」と「型の練習」とに区別することができる。また，外面的な技術の練習の他に，内面的な要素を含むものとしての「稽古」をみいだしているのである。しかし，現在の風潮では「稽古」と「練習」は同義として捉えている感が強い。

次に金子による稽古の捉え方を著書「剣道学」によって明らかにしたい。先に引用しているように同書によれば「稽古」は基本及び応用動作[14]と試合との連絡練習(精神の鍛錬を含む)と技術の向上の練習であるとしている。また，次の引用からも分かるように基本及び応用動作の練習には精神上の鍛錬を含まないとしていることから「稽古」とは区別しているようである[13]：

一．連絡練習として行ふ理由

稽古は基本及び應用動作から試合に移る為めの連絡的の行ふ練習である，基本及び應用動作は，基礎的に撃突を約束的に教育するものであって，敵の變化に對する動作を練習するものではない。故に機眼及び其他の精神上の方面は餘り鍛錬することができない。

試合は殆ど真剣勝負に近い對敵動作であるから，精神の大部分は敵との懸け引きに消費され，撃突の方法に就いては深く意をとゞめる事が出来ない。若し精神の活動の少ない基本應用動作の練習後，直ちに精神活動の大なる試合を實施したならば，必ずや不良の姿勢，不合理の撃突を行ふ様になり，折角苦心して教育した基本動作も根底から破壊されるのである。故に稽古を行つて此の間を連結するのである。之が為めに気勢を充實させて行ひ，己より技術の上達した者に練習させて貰ふがよい。

二．技術の向上として行ふ理由

習技者は，工夫して諸般の術を試行し，失敗に失敗を重ねても尚屈せず研究を繼續するから，從って技術を向上させる事が出来る。其形式は試合の様に

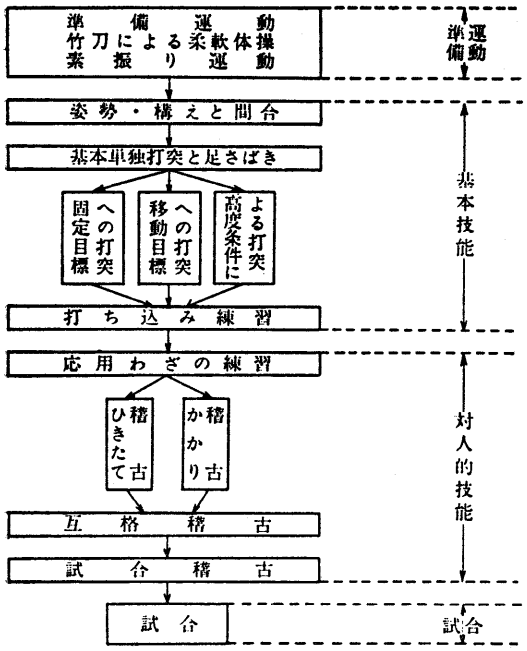


図 1　練習の進め方
〔持田盛二監修「図説剣道辞典」，講談社，昭和 50 年，p. 248 より〕

行ふべきである。時には己より技術の劣つて居る者に對して技術を練習するのも亦一の方法である。稽古の方法を見るに，此の二種を混同して，稽古する者が多い様に見受けるが，其れは注意すべき事である。(p. 357)

このように「剣道学」における「稽古の目的」では基本・応用動作を身につけてから，剣道の稽古がはじまると考えられる。さらにその中には研究すること，継続して行うことが含まれるようである。また，図説剣道辞典においても同様に，基礎・応用動作の習得を「練習」という用語で表記し，試合のための総合練習を「稽古」で表記して，二つを区別している（図 1 参照)。

その他，剣道学において「稽古の方法」を，「個人稽古法」と「団体稽古方法」に分け記述している[13]：

稽古を行ふには，技倆勝れて居る者が所謂元立となつて，未熟な者を連續的に稽古をつけるのである。若し習技者の技倆が殆んど相等しく，教師が一人の時は，先づ習技者を三組に分けて一組をして教師の前に座らせ，一方より一人づゝ教師が稽古を為す。教師に稽古を願つた者，又は教師に稽古を願ふ為めに己の番を待つ者は教師の前に座らせて後述の見學の要領に則つて，教師及習技者の姿勢，撃突方法，気勢を見學するがよい。

他の二組は互に稽古を為す。時には一人に幾人も交代して懸り，思ひ切つて其者と稽古し，耐久力を養成することも亦大切である。

稽古するには，道場に上座と下座とあつて，上座には，比較的技倆の優秀な者が立ち，下座には未熟者が立つて，相向つて互に稽古をする。之を上座の者から言へば，引立て稽古と言ひ，下座の者から言へば，懸り稽古と言ふ。一本の稽古の終りには必ず撃ち込み，體當り，切り返しを行ふがよい。何となればかくする事に依つて體を十分に伸ばし，心を捨て，十分に撃ち込む習慣を養成することが出来る。稽古時間の配當は，準備動作を行つた後，初めの十分間乃至十五分間撃ち込み，體當り，切り返しを行ひ，次に稽古に移り一通り適度に練習したならば，基本動作及び應用動作を行ふ，又時に依つては初めは基本動作或は應用動作を行ひ，次に稽古に移り最後に撃ち込み，體當り，切り返しを行ふてもよい……以下略 (p. 359)

上記の引用は個人稽古法について記されたもので，古来からの稽古法であると述べられている。又この方法によって剣道が比較的強度の運動であるにもかかわらず，適度に行うことができるのであるとも述べられている。さらに，稽古における時間が記述されている点も注意しておきたい。

「団体稽古方法」は以下の引用から，学校等を対象とした稽古方法であるといえる。これは近代化の導入による一斉指導の方法として考案されたものと考えることができよう[13]：

学校の様に，一人の教師で多くの比較的技倆の等しい習技者を稽古し，又は其稽古方法を監視して，其缺點を補うには，團體稽古の方法に待つより外はない。只團體稽古は體質の異なる習技者をして，一定の時間，一定の動作を行はせるのであるから，中には過労に陥る者が無いとも限らぬ。故に教師は常に習技者の状態に注意して過労の徴候が現れた者は直ちに休止させることを忘れてはならぬ。(p. 360)

その他，稽古の方法に生理学的考察が加えられている

点も注目するに値しよう。

又，稽古実施上の注意が記述されているので次に引用しておこう[13]：

第三　稽古實施上の注意

A．師長に稽古を願ふ時は，我が身を捨て如何にせば我が身が一秒も早く疲労するかと工夫し，一時に気勢を充實し，思ひ切つて稽古するがよい。

B．技倆の相等しい者と稽古する時は，己が習得した動作を實際に活用し工夫して行ふがよい。

C．未熟の者と稽古する時には，己の未熟な動作即ち不得意の動作を練習して之に練熟する様に心掛けるがよい。

D．撃突の命中のみに腐心しないで，正確な姿勢及び確實な使術によつて撃突すること。

E．虚隙の有無に關せず猛烈に撃突すること。

F．撃突距離を遠くして，大技に撃突させること。

G．反復練習すること。

H．敵の撃突を厭はぬこと。

I．あらゆる術に練習し，偏習しないこと。

(p. 365)

以上9つの稽古実施上の注意が示されており，ここでは技術の習得に重点が置かれている。しかし，精神的な修養についてはふれていない。

### 3. 『五輪書』[15] にみる稽古の概念

『五輪書』は「地・水・火・風・空」の5巻によって構成されている。

地之巻においては兵法の概要を述べ，その理論的根拠を8項目から明らかにしている。

水之巻では二天一流の兵法を 36 項目から説明し，火之巻では実戦の場に臨んで，敵に打ち勝つための要点を27項目に分けて論じ，それぞれに吟味，鍛錬，工夫，分別すべきことを説明している。

さらに，風之巻では当流と他の諸流との，技法上の相違点を9項目にまとめて論じ，二天一流の優位性を明らかにしようとしている。

最後の空之巻においては二天一流の極意について述べている。

武蔵はこの書を記述するにあたって，仏教や儒教でつかわれる古語や軍記，軍法の故事はつかわず，自分自身の体験から素直に書くことを示している。

『五輪書』において武蔵は兵法の道を5つに分けてその理を書きあらわすと述べているが，5巻を通して体系的理論の組立はされておらず，段階的習熟での稽古法は述べられていないように思われる。つまり，『五輪書』における兵法はそれぞれが基本であり，応用であり，実践であるといえよう。

そこで，五輪書の中で二天一流の術理を記述している二巻，すなわち水之巻・火之巻を中心に武蔵の稽古論を概観していくことにしたい。武蔵が『五輪書』をとおして兵法を学ぶための要点として吟味・鍛錬・工夫・分別[15]すべきことを挙げている。これは稽古の要点とも考えられる。

#### 1) 『水之巻』にみる稽古

水之巻では最初に二天一流の根本は勝利の道を見出していくものであるとし，その心得を説いている。次に姿勢，目付けについて説明し，太刀の持ち方，体さばきについて述べている。さらに，構え，基本及び応用動作についてまとめている。したがって，水之巻では対人的関係の中における主体的技術の稽古法について述べたものであるといえる。そしてそれらすべては実践的に組み立てられているといえよう。

先ず，最初に稽古の心構えが述べられているので，ここに引用しておきたい[15]：

此道にかぎつて，少なり共，道を見ちがへ，道のまよいありては，悪道へ落るもの也。此書付けばかりを見て，兵法の道には及事にあらず。此書にかき付たるを我身にとつて，書付を見るともおもはず，ならふとおもはず，にせ物にせずして，即我心見出したる利にして，常に其身になつて，能々工夫すべし。(p. 41)

これによると，この書を読むだけでは兵法の原則を学ぶことはできない。また稽古の実際にあってはただ単に五輪書の内容を模倣するのではなく，常に自分自身で見出したようにして鍛錬・工夫していくことが大切であると述べているのである。

次に「水の巻」において「稽古」が使用されている箇所を抜き出し，稽古を概観してみたい[15]：

一．五つのおもての次第，第一の事

第一の構，中段。太刀さきを敵の

…… 中　略 ……

五つのおもてのぶんは，手にとつて，太刀の道稽古する所也。此五つの太刀筋にて，我太刀の道をも

しり，いかやうにも敵の打つ太刀しるる所也。是二刀の太刀の構，五つより外にあらずとしらする所也。鍛錬すべきなり。(p. 52)

一．おもて第二の次第の事
第二の太刀，上段に構へ，敵打ち
…… 中　略 ……
此おもての内におゐては，様々の心持，色々の拍子子，此おもてのうちをもつて，一流の鍛錬をすれば，五つの太刀の道こまやかにしつて，いかやうにも勝つ所あり。稽古すべき也。(p. 53)

一．おもてをさすといふ事
面をさすといふは，敵太刀相になりて，敵の太刀の間，我が太刀の間に，敵のかほを我太刀さきにてつく心に，常に思ふ所肝心也。敵の顔をつく心あれば，敵の顔，身も，のるもの也。敵をのらするやうにしては，色々勝つ所の利あり。能々工夫すべし。たゝかいの内に，敵の身のる心ありては，はや勝つ所也。それによつて，面をさすといふ事，忘るべからず。兵法稽古の内に，此利，鍛錬あるべきもの也 (p. 68)

一．かつとつといふ事
喝咄といふは，いづれも，我打ちかけ，敵をおつくむ時，敵また打ちかへすやうなる所，したより敵をつくようにあげて，かへしにて打つ事，いづれもはやき拍子を以て，喝咄と打ち，喝とつきあげ，咄と打つ心也。此拍子，何時も打ちあいの内には，専ら出合ふ事柄。喝咄のしやう，きつさきあぐる心にして，敵をつくと思ひあぐると一度にうつ拍子，能く稽古して吟味あるべき事也 (p. 69)

一．多敵のくらいの事
多敵のくらいというは，一身にして大勢と
…… 中　略 ……
敵の敵(ママ)の拍子をうけて，くづるゝ所をしり，勝つ事也。折々あい手を余多よせ，おいこみつけて，其心を得れば，独りの敵も，十二十の敵も，心安き事也。能く稽古して　吟味有るべき也 (p. 72)

一．一つの打といふ事
此一つの打といふ心をもつて，慥に勝つ所を得る事也。兵法能くまなばざれば，心得がたし。此義能く鍛錬すれば，兵法心の儘になつて，思ふ儘に勝つ道也。能々稽古すべし。(p. 73)

上記六つの引用は二天一流の剣技について説明している箇所である。ここでの稽古は技術習得に重きが置かれていると考えられる。「五つのおもての次第，第一の事，おもて第二の次第の事，おもてをさすといふ事，一つの打といふ事」のところでは「鍛錬」と組み合わされて「稽古」が使われていることから，そこでの技術習得は体得することに重点がおかれているのではないだろうか。また「多敵のくらいの事，かつとつといふ事」の箇所では「吟味」と組み合わされている。ここでは技術そのものよりも技術の出すべきところ，つまり現代剣道で言うところの「打つべき好機」を会得することに主眼がおかれていると思われる。

次に示す稽古は，先に述べたような技術の習得を意味するものではなく，稽古そのものの価値をあらわしているといえよう[15]：

一．打ちあいの利の事
此うちあいの利といふ事にて，兵法，太刀にての勝利をわきまゆる所也。こまやかに書きしるすにあらず。能く稽古ありて，勝つ所をしるべきもの也。大形兵法の実の道を顕はす太刀也。口伝 (p. 72)

資料1は水の巻において武蔵が稽古論を展開するにあたって具体的にその内容を示したものを吟味・鍛錬・工夫・分別に分類したものである。

資料1によれば比較的精神の修養に重点をおいた吟味・工夫・分別と身体的修養に重点をおいた鍛錬に大別することができる。

次の引用は水之巻をまとめた箇所であるといえる[15]：

右書付くる所，一流の剣術，大形此巻に記し置く事也。兵法，太刀取りて，人に勝つ所を覚ゆるは，先づ五つのおもてを以て五方の構をしり，太刀の道を覚へて惣躰自由になり心のきゝ出でて道の拍子をしり，おのれと太刀も手さへて，身も足も心の儘にほどけたる時に随ひ，一人にかち，二人にかち，兵法の善悪をしる程になり，此一書の内を，一ヶ条一ヶ条と稽古して，敵とたゝかい，次第次第に道の利を得て，不断心に懸け，いそぐ心なくして，折々手にふれては徳を覚へ，いづれの人とも打合ひ，其心をしつて，千里の道もひと足宛はこぶなり。緩々と

資料 1 「水の巻」における稼古の特質的分類

[吟　味]

一　兵法心持の事
兵法の道におゐて，心の……中略……能々吟味すべし。

一　兵法の身なりの事
身のかゝり，顔はうつむかず……中略……能々吟味すべし。

一　兵法の目付けといふ事
目の付けやうは，大きに広く……中略……能々吟味あるべきもの也。

一　足づかひの事
足のはこびやうの事……中略……能々吟味すべきもの也。

一　五方の構の事
五方のかまへは，上段……中略……能々吟味すべし。

一　おもての第四の次第の事
第四の構，左の脇に……中略……能々吟味あるべし。

一　太刀にかはる身といふ事
身にかはる太刀ともいふべし……中略……能々吟味して打ならふべき也。

一　しうこうの身といふ事
秋猴の身とは，手を出さぬ心なり……中略……能々吟味すべし。

一　しつかうの身といふ事
漆膠とは，入身に能く付きてはなれぬ心也……中略……能々吟味有るべし。

一　はりうけといふ事
はりうけといふは……中略……能く習ひ得て吟味有るべし。

[工　夫]

兵法二天一流の心，水を本として……中略……常に其身になって，能々工夫すべし。

一　打つとあたるといふ事
打つといふ事，あたるといふ事，二つ也……中略……あたるはさわるほどの心，能くならひ得ては，各別の事也。工夫すべし。

一　たけくらべといふ事
たけくらべといふは……中略……能々工夫有るべし。

[分　別]

一　おもての第五の次第の事
第五の次第，太刀の構……中略……能々分別すべし。

一　有構無構のおしへの事
有構無構といふは，太刀を……中略……能々分別すべし。

一　縁のあたりといふ事
我打出す時……中略……細々打ちあひて分別あるべき事也。

一　ねばりをかくるといふ事
敵もうちかけ，我も太刀打ち……中略……此事分別有るべし。

一　心をさすといふ事
心をさすといふは……中略……能々分別すべし。

[鍛　練]

一　太刀の道といふ事
太刀の道を知るといふは……中略……能々鍛練すべし。

一　五つのおもての次第，第一の事
第一の構，中段。太刀さきを敵の……中略……五つのおもてのぶんは，手にとつて，太刀の道稽古する所也。此五つの太刀筋にて，我太刀の道をもしり，いかやうにも敵の打つ太刀しるる所也。是二刀の太刀の構，五つより外にあらずとしらする所也。鍛練すべきなり。

一　おもての第二の次第の事
第二の太刀，上段に構へ，敵打ち……中略……此おもての内におゐては，様々の心持，色々の拍子，此おもてのうちをもつて，一流の鍛練をすれば，五つの太刀の道こまやかにしつて，いかやうにも勝つ所あり。稽古すべき也。

一　おもての第三の次第の事
第三の構，下段に持ち……中略……太刀をとつて鍛練あるべき也。

一　敵を打つに，一拍子の打の事
敵を打つ拍子に，一拍子といひて……中略……間の拍子をはやく打つ事。鍛練すべし。

一　無念夢相の打といふ事
敵も打ちださんとし，我も打ちださんと思ふ時……中略……能々ならひ得て鍛練あるべき儀也。

一　石火のあたりといふ事
石火のあたりは……中略……よく鍛練すれば，つよくあたるもの也。

一　紅葉の打といふ事
紅葉の打，敵の太刀を打ちおとし，太刀取りなをす心也。敵前に太刀を構へ，うたん，はらん，うけんと思ふ時，我打つ心は，無念無相の打，又石火の打にても，敵の太刀を強く打ち，その儘あとをねばる心にて，きつさきさがりにうてば，敵の太刀必ずおつるもの也。此打鍛練すれば，打ちおとす事やすし。能々稽古あるべし。

一　身のあたりといふ事
身のあたりは……中略……能々鍛練あるべし。

一　三つのうけの事
三つのうけといふは……中略……能々鍛練あるべきもの也。

一　おもてをさすといふ事
面をさすといふは，敵太刀相になりて，敵の太刀の間，我が太刀の間に，敵のかほを我太刀さきにてつく心に，常に思ふ所肝心也。敵の顔をつく心あれば，敵の顔，身も，のるもの也。敵をのらするやうにしては，色々勝つ所の利あり。能々工夫すべし。たゝかいの内に，敵の身のる心ありては，はや勝つ所也。それによつて，面をさすといふ事，忘るべからず。兵法稽古の内に，此利，鍛練あるべきもの也。

一　一つの打といふ事
此一つの打といふ心をもつて，慥に勝つ所を得る事也。兵法能くまなばざれば心得がたし。此義能く鍛練すれば，兵法心の儘になつて，思ふ儘に勝つ道也。能々稽古すべし。

一　直通のくらいといふ事
直通の心，二刀一流の実の道をうけて，伝ゆる所也。能々鍛練して，此兵法に身をなす事肝要也。口伝。

思ひ，此法をおこなふ事，武士のやくなりと心得て，けふはきのふの我にかち，あすは下手にかち，後は上手に勝つとおもひ，此書物のごとくにして，少しもわきの道へ心のゆかざるやうに思ふべし。縦ひ何程の敵に打ちかちても，ならいに背く事におゐては，実の道にあるべからず。此利心にうかびては，一身を以て数十人にも勝つ心のわきまへあるべし。然る上は，剣術の智力にて，大分一分の兵法をも得道すべし。千日の稽古を鍛とし，万日の稽古を練とす。能々吟味有るべきもの也。(pp. 73-76)

資料 2 「火の巻」にみる稽古の特質的分類

[吟 味]

— 枕をおさゆるといけ事
枕をおさゆるとは……中略……枕をおさゆる事，能々吟味有るべき也。

— とをこすといふ事
渡を越すといふは……中略……能々吟味あるべし。

— けんをふむといふ事
剣をふむといふ心は……中略……能々吟味有るべし。

— 敵になるといふ事
敵になるといふは……中略……能々吟味すべし。

— かげをうごかすといふ事
陰をうごかすといふは……中略……能々吟味あるべし。

— むかつかするといふ事
むかつかするといふは……中略……克々吟味有る可也。

— おびやかすといふ事
おびゆるといふ事……中略……能々吟味あるべし。

— まぶるゝといふ事
まぶるゝといふは……中略……克々吟味あるべし。

— かどにさわるといふ事
角にさわるといふは……中略……此事能々吟味して，勝つ所をわきまゆる事専也。

— うろめかすといふ事
うろめかすといふは……中略……能々吟味あるべし。

— 三つの声といふ事
三つのこゑとは……中略……能々吟味あるべし。

— ひしぐといふ事
ひしぐといふは……中略……能々吟味有るべし。

— さんかいのかわりといふ事
山海の心といふは……中略……能々吟味有るべき事也。

— あらたになるといふ事
新に成るとは……中略……能々吟味あるべし。

— そとうごしゆといふ事
鼠頭牛首といふは……中略……此事能々吟味有る可者也。

[吟味・鍛練]

— 場の次第といふ事
場のくらいを見わくる所……中略……能々吟味し鍛練有るべきもの也。

[鍛 練]

— 三つの先といふ事
三つの先，一つは我方より敵へ……中略……いづれも先の事，兵法の智力を以て，必ず勝つ事を得る心，能々鍛練あるべし。

— そこをぬくといふ事
底を抜くといふは……中略……能々鍛練あるべし。

— つかをはなすといふ事
束をはなすとゆふに……中略……能々鍛練すべし。

[工 夫]

— けいきを知るといふ事
景気を見るといふは……中略……工夫有るべし。

— くづれを知るといふ事
崩れといふ事は……中略……工夫すべきもの也。

— かげをおさゆるといふ事
影をおさゆるといふは……中略……能々工夫有るべし。

— うつらかすといふ事
移らかすといふは……中略……能々工夫有るべし。

— しやうそつをしるといふ事
将卒を知るとは……中略……工夫有るべし。

[分 別]

— 四手をはなすといふ事
四手をはなすとは……中略……能々分別すべし。

— まぎるゝといふ事
まぎるゝといふは……中略……能々分別すべし。

上記引用の最後の「千日の稽古を鍛とし，万日の稽古を練とす」に集約されるように日々の稽古の積み重ねが肝心であることを武蔵は説いている。

**2) 『火之巻』にみる稽古**

火之巻ではその冒頭の部分で示しているように勝負に関することを書きあらわしている。つまり，相手(敵)との関係における様々な戦法に重点をおき，その稽古論を展開しているのである。

先ず，「稽古」が使用されている箇所を抜き出し稽古を概観してみる[15]：

更には命をばかりの打あいにおゐて，一人して五人十人ともたゝかい，其勝つ道慥に知る事，わが道の兵法也。然るによつて，一人して十人にかち，千人をもつて万人に勝つ道理，何の差別あらんや，能々吟味有るべし。さりながら，常々の稽古の時，千人万人を集め，此道しならふ事，成る事にあらず。独り太刀をとつても，其敵々の智略をはかり，敵の強弱，手だてをしり，兵法の智徳を以て，万人に勝つ所を極め，此道の達者と成り，我兵法の直道，世界におゐて誰か得ん，又いづれかきわめんと慥に思ひとつて，朝鍛夕練して，みがきおほせて後，独り自由を得，おのづからきどくを得，通力不思議有る所，是兵として法をおこなふ息也。(pp. 77-79)

命をかけての打ち合いにおいて，一人で五人，十人と戦い確実に勝つ道を身につけていくのが二天一流の兵法である。したがって，一人で十人に勝つことができれば，千人で一万人に勝てるのが道理である。しかし，普段の稽古の時から千人，一万人集めての稽古はできない。だから一人で稽古するときも常に相手のことを考え，兵法の理をもって行えば一万人に勝つこともできるようになるのだと記しているのである。

資料2は火之巻において武蔵が稽古論を展開するにあたって具体的にその内容を示したものを吟味・鍛錬・工夫・分別に分類したものである。この資料によれば精神的修養の意味を持つ吟味が圧倒的に多く，火之巻で述べられている 27 項目中半数以上をしめる。さらに精神的修養と身体的修養に大別してみると，そのほとんどが精神的修養を意味する項目となる。これによって，実践場面での心の動きを中心に論が進められていることが理解できよう。

つまり，水之巻が二天一流の基礎的技術的稽古論を展開したのに対し，火之巻では，応用的戦術的稽古論を展開していることになろう。

## 4. 昭和初期の剣道書と『五輪書』との比較検討 ～むすびにかえて～

「稽古」は日本における武芸・芸道関係においてよく使われる概念で，近代スポーツの技術獲得に使われる「練習」に近いが，必ずしも稽古＝練習とは捉えにくい感がある。

「練習」には，同じ動作の繰り返しと，その繰り返しによるその動作の進歩とが含まれ，その進歩は量的に示される。

「稽古」はその字義において「古の道を考える」ことであり，同じ動作の繰り返しと，その繰り返しによるその動作の進歩とが含まれるが，その進歩は量的にはしめされず，業の善し悪しなどの質的に表現される「道」的思想を展開させた言葉であるといえよう。

以上の点を考慮して，昭和初期の剣道書と『五輪書』における「稽古」の概念を，共通点・相違点について比較検討した結果，次のようにまとめられる。

〔共通点〕

(1)「稽古」の語義をふまえたうえで，試合（実戦）のための「稽古」を論じている。

(2) 稽古の要素として，工夫・研究すること・専念することなどをあげている。

(3)「稽古」には操刀技術の習得と，精神的修養とを含めている。

〔相違点〕

(1) 昭和初期の剣道書では，難易度の低いものから高いものへと段階的技術の向上が図られるのに対し，『五輪書』では段階的技術の向上が図られていない。

(2) 昭和初期の剣道書が「教授する」という立場で「稽古」の概念を定義しているのに対して，『五輪書』では「自得する」という立場で「稽古」をとらえている。

(3)『五輪書』が個人を対象に稽古論が展開されているのに対し，昭和初期の剣道書では，集団の稽古の立場から個人の稽古論を展開している。

(4)『五輪書』における「稽古」は，すべて技術の修得過程を対象にしているのに対し，昭和初期の剣道書では，基礎及び応用動作の習得を稽古に含んでいない。

### 注・引用参考文献

1) 孔子：「書経」，『漢籍国字解全書』所収，早稲田大学出版部，明治 43 年，p. 10.

2) 「漢書」(班固の著), 中国の歴史書〔(諸橋轍次:「大漢和辞典」, 昭和 49 年, p. 611)〕より引用.
3) 「後漢書」(范曄の著), 後漢一代のことを記した断代史〔(諸橋轍次:「大漢和辞典」, 昭和 49 年, p. 611)〕より引用.
4) 嵯峨・清和・醍醐三天皇の時代に定められた格式を集めたもの〔(諸橋轍次:「大漢和辞典」, 昭和 49 年, p. 611)〕より引用.
5) 藤原明衡撰:「本朝文粋」,『日本文学全集』23 巻所収, 東京河出書房, 昭和 37 年.
6) 藤原宗忠:「中右記」, 中御門右大臣藤原宗忠の日記, 1087 年～1138 年に及ぶ〔(日本大辞典刊行会:「日本国語大辞典」7 巻, 小学館, 昭和 51 年, p. 51)〕より引用.
7) 藤原定家:「明月記」, 藤原定家の日記, 1180 年～1235 年に及ぶ〔(日本大辞典刊行会:「日本国語大辞典」7 巻, 小学館, 昭和 51 年, p. 51)〕より引用.
8) 「平治物語」,『日本文学全集』12 巻所収, 東京河出書房, 昭和 37 年.
9) 世阿見:「風姿花伝」,『近世芸道論』所収, 岩波書店, 昭和 47 年.
10) 笹間良彦:「図説日本武道辞典」, 柏書房, 昭和 57 年, p. 283.
11) 持田盛二監修:「図説剣道辞典」, 講談社, 昭和 45 年, p. 242.
12) 野間 恒:「剣道読本」, 大日本辨會講談社, 昭和 14 年, p. 105.
13) 金子近次:「増補改訂剣道学」, 資文堂, 昭和 4 年, 引用箇所末尾に頁を記載.
14) ここでいう基本・応用動作とは剣道における体の運用 (足さばき), 竹刀の持方, 構え, 打ち込み等のことであり, 対人的関係にない動作をさしている。
15) 宮本武蔵:「五輪書」, 岩波文庫, 昭和 60 年, 引用箇所末尾に頁を記載.